

リトル・ミス・サンシャイン

2006(平成18)年11月1日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督＝ジョナサン・デイトン、ヴァレリー・ファリス／出演＝アビゲイル・ブレスリン／グレッグ・キニア／トニ・コレット／ポール・ダノ／アラン・アーキン／スティーヴ・カレル (20世紀フォックス映画配給／2006年アメリカ映画／100分)

……小泉政権から安倍政権へ移行する中、最大の論点は格差の是正、すなわち「勝ち組 VS 負け組」の修正となっているが、私はそんな二分法には大反対！ そんな中、「勝ち組になれ！」と鼓舞激励するフーヴァー家の家長だが、そんな自分を含めてファミリーみんなは「負け組」……？ しかし、「負け組」の何が悪いの！ そんな思いを笑いと感動の涙で綴り、第19回東京国際映画祭コンペ部門3冠を受賞した名作が誕生！ こんな映画を観ていれば、今流行りのいじめや自殺もなくなると思うのだが……。

これは意外な掘り出しモノ！

試写の案内が次々と舞い込む中、法廷の合間に何とかその予定を入れようと努力している毎日だが、今日11月1日は午前10時から税務調査が予定されていた。そんな日でも1時から予定されているこの『リトル・ミス・サンシャイン』は、4日前の10月28日に第19回東京国際映画祭コンペ部門最優秀監督賞、最優秀主演女優賞、観客賞の3部門を受賞したという新聞記事を読んでいたため、何としても観なければと思い、調査の合間をぬって試写室へ出かけたもの。

作品によってはガラガラの日がある試写室も、さすがにみんな耳が早い。今日は満席で、折りたたみイスを目いっぱい並べるほどの盛況。こんなに無理をしてまで観た価値はあったのか……？ その答えはもちろんYes。「勝ち組」VS「負け組」の言葉が今ほど定着している時代はないと思われる日本で、この映画はまさに最高！ なぜなら、私はそもそもそのような分類が大嫌い、「禍福は糾え

る縄の如し」のことわざどおり、何が勝ち組で何が負け組かなんて、そんなにはっきりしたものではないと考えている。

そんな私の価値観に照らせば、この映画は、「負け組」のすばらしさを高らかに謳いあげるとともに、それが可能となったのは家族の絆によるものだということを、笑いと感動の涙の中で実感させてくれるもの。ホントにこれは意外な掘り出しモノで、上記受賞も当然と納得！

フーヴァー家の家長は？

この映画はあえてこれといった主人公を特定せず、フーヴァー家の家族全員を主人公に設定……。それはそれでいいのだが、フーヴァー家の中でまともなのは母親のシェリル（トニ・コレット）くらいで、その他はみんなケツタイな奴ばかり……。

まずフーヴァー家の家長であるリチャード（グレッグ・キニア）は、自ら開発した「9ステップ理論」を信じ込み、「人生の勝ち組になることが幸せの秘訣」という信念を持って、常に前向きの人生を目指している。そのため今日もある教室で、負けを拒否するモチベーションスピーカー（成功論提唱者）としての堂々たる演説を……。

彼は現在、その「9ステップ理論」をまとめた本を出版する直前の段階を迎えており、これが実現すれば収入もガッポリと……。しかし、もし万一その出版がボツになれば……。いやいやそんな後ろ向きのことを考えないのが、リチャードの「9ステップ理論」……？

シェリルもご苦労なことで……

フーヴァー家で唯一人まともなシェリルが今病院に向かっているのは、シェリルの兄のフランク（ステイヴ・カレル）に会うため。フランクは「アメリカ最高のブルースト研究者」だが、あくまでそれは自称で、ライバルの研究者が世間から注目され、もてはやされていく中絶望し（？）、自ら手首を切って自殺未遂騒動を……。

そんなフランクを病院から引き取り、フーヴァー家でしばらく静かな生活をさ

せてやるのが妹シェリルの役目。これにはもちろんリチャードは反対したが、シェリルが無理矢理押し切ったもの。しかしフランクがいなくても、後述のようにケツタイな奴ばかりを抱え込んでいる家族の中で、さらにフランクのような身内が加わるのだから、シェリルの苦労は大変だと同情していたが……。

息子とは意外に意気投合……？

リチャードとシェリルの息子がドウェーン（ポール・ダノ）だが、これが何ともヘンな奴。すなわち、彼は空軍へ入隊しテストパイロットになることを夢見ている15歳の高校生だが、その目標達成のために日々肉体鍛練を欠かさない。それはいいのだが、何と彼は尊敬する哲学者ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』を愛読し、ニーチェに倣って「沈黙の誓い」を立て、それを何カ月もホントに実行している。したがって、家族との意思疎通もそのほとんどは首を縦に振るか、横に振るかで済ませ、どうしても言葉が必要な時だけは筆談を……。

そんなドウェーンの部屋で同居させられることになったフランクだが、フランクは「物静かな」ドウェーンと意外に意気投合……？

おやじのおやじもヘンな奴……

おやじがヘンな奴なら、そのおやじのグランパ（アラン・アーキン）もそれに輪をかけたようなヘンな奴……。彼が老人ホームを追い出されたのは、ヘロインの吸入を止められないため。ヘロインを吸って何をするのかというと、第2次世界大戦で戦った経験を拠り所に、今でも「現役バリバリ」だと自慢したいらしく、今でもポルノ雑誌を愛好しているというからかなりヘン……？

ところが、そんなおじいさんでも孫のオリーヴ（アビゲイル・ブレスリン）とはウマが合うよう……。

この映画のタイトルは……？

この映画のタイトルとなったのは、美少女コンテスト「リトル・ミス・サンシャイン」で優勝することを夢見ているリチャードとシェリルの娘で、ドウェーンの妹になるオリーヴに焦点をあてたため。そう聞くと、誰でもオリーヴはどんな

美少女かと思うのは当然だが、スクリーン上に登場するのはメガネをかけお腹がポッコリと出た、とても美少女とは言えない普通の女の子。私の目から見ても、そんな女の子にそんな夢の実現は土台ムリだと思うのだが、本人はいたって真剣らしい……？ そして、そんな夢のために力を貸しているのが祖父のグランパで、オリーフは目下彼の振付指導を受けてダンスを特訓中……。

全員そろった食事だが……

アメリカの食事風景は、核家族化し家族それぞれがバラバラになってしまった今の日本と違い（？）、全員そろってとるのが習慣。それがこの映画でもよくわかる。シェリルの兄のフランクを連れてきたその日の夕食にもフーヴァー家全員がそろったが、メニューはシェリルが忙しかったこともあり、即席でつくられたサラダとできあいのチキンをめいめいが紙のお皿にとって食べるもの。

「また今日もチキンか！」と文句を言うグランパをなだめながら家族そろった食事が始まったが、その話題は、小さい女の子には全く不釣り合いなフランクの自殺騒動の話……。

その結果、自殺未遂の原因が学問上の問題だけではなく、ホモの恋人を奪われたことにあると知った時、グランパはフランクに対して、「ホモ野郎」と罵声を浴びせたうえ、リチャードはフランクを「負け犬」と決めつけ、例によって「勝ち組になれ！」との持論をとうとうと述べた。

そんなウンザリする話題の中で白け気味の食事の最中にルス電を再生してみると、何とそれはリトル・ミス・サンシャインコンテスト地方予選優勝者が失格となり、くり上げ優勝となったオリーフがカリフォルニアのレドンド・ビーチで行われる決勝出場資格を得たことを伝えるもの。これにオリーフは有頂天になったが……？

バラバラな家族、それぞれの反応は……？

フーヴァー家が住んでいるのはアリゾナ州。そして決勝大会が開かれるのは、カリフォルニア州のレドンド・ビーチ。したがって通常の移動手段は飛行機だが、今のフーヴァー家にはオリーフとそれに付き添うシェリルやグランパの飛行機代

もままならない有り様。そのうえリチャードは出版に向けた打ち合わせで忙しいし、いつ自殺するかもしれないフランクを高校生のドウェーンと2人だけで生活させるのは不安。

こりゃ、家族全員がフーヴァー家が所有するミニバスに乗ってレドンド・ビーチまで行くしかない、そう宣言したシェリルだったが、リチャードとドウェーンは大反対。しかし一家がもめるとそのまとめ役となるのは、結局いつもシェリル。まず、リチャードがしぶしぶ同意したから、「絶対にイヤだ」と言っていたドウェーンも反対が自分1人だけになると、遂に折れることに……。これにて、フーヴァー家の一家6人が勢ぞろいして、オンボロのフォルクスワーゲンのミニバスに乗り込んだが……。

これでもか、これでもかとトラブルが……

この映画は決してコメディではなく、本当は家族の絆、家族の再生を描く涙の感動作。しかし、アリゾナ州からカリフォルニア州へのミニバスでの珍道中(?)を観ていると、これでもか、これでもかというほど次々とトラブルが舞い込み、そのたびに観客は戸惑うというよりも笑いに包まれていくから不思議。旅全体を通じて描かれるトラブルはオンボロ車の故障騒ぎだが、これは映画を観てのお楽しみに……。

第1のトラブルは、レストランで「1人4ドル以内」の予算で昼食をとる途中、リチャードが出版社に電話したところ、順調に進んでいると思っていた出版計画がダメになったと聞かされたこと。負けを拒否することがモットーのリチャードにしてみれば、自分が創設した「9ステップ理論」の出版が成功することは理論上当然のことで、万一それが実現しないことになれば、自分が「負け組」になってしまうことに。

そんなバカな……と思いつつも、現実が現実。出発したバスの中で、運転するリチャードと助手席に座るシェリルとの間で大激論となったのは当然。もし出版計画がボツになれば、一家の生活費の捻出はもちろん、カリフォルニアへ行く旅費すらもヤバいことになるのだから……。

第2のトラブルは

第2のトラブルはグランパの死亡。長い1日の旅を終えて、家族はモーテルに部屋をとったが、そこではグランパとオリーヴが一緒の部屋に……。翌日の振り付け(?)の稽古をした後「おやすみ」とベッドの中に入った2人だったが、その部屋まで聞こえてくる怒鳴り声は派手にやり始めたリチャードとシェリルのケンカ。リチャードの主張は「お金が続かないからカルフォルニアへの旅を中止し家に帰ろう」という現実的なものだが、シェリルは「あれほど確実だと言っていたのに!」とリチャードを責めるばかり。しかしリチャードだって、突然の出版キャンセルの話に戸惑い混乱している真っ最中……。いくらここでケンカを続けても仕方がないと考えたリチャードは、1人再交渉に出かけていったが、結局ダメなものはダメ。

失意の中で、部屋に戻り、翌朝目を覚ますと、オリーヴから「おじいちゃんが起きてこない」という奇妙な訴えが……。さて、リチャードとシェリルがグランパのベッドをのぞいてみると、何とグランパは1人安らかにあの世行き……。

よくもまあこんな決断を……?

やたらテンションの高いヘンなおじいさんだったが、やはりヘロイン吸引の悪習が体をむしばんでいたよう。突然のグランパの死亡にリチャードは嘆き悲しんだが、とりあえず死体埋葬の手続をしなければならない。しかしその手続は意外に面倒。旅の途中でそのために足止めをくえば、ミスコンに間に合わなくなってしまふ。そうかといって、誰かを残していくわけにもいかない……。

そんな中とんでもない決断をしたのは、やはり一家の大黒柱であるリチャード。ネタバレ覚悟で言えば、それはグランパの死体を車に積んだままミスコン会場まで行き、カルフォルニアで死体埋葬の手続を行うこと。誰の目にもそんな行為が許されないことは明かだが、そんな違法な決断を笑いとユーモアの中で家族全員が協力してやっていくところが、この映画の面白さ……?

そのうえ、高速道路路上ではオンボロミニバスの後ろに白バイがついたうえ、何とサイレンまで鳴り出したから大変。そのハプニングもあわせて大いに楽しみた

いものだ。

第3のトラブルは……？

第3のトラブルは、実は私が小学生時代に体験したのと全く同じもの。それはオリーブが取り出した数字読みのカードを見たドウェーンが、その数字を読み取ることができなかったこと。そのカードとは、誰でも一度はテストしたことがある色盲検査のカード。これは音が左右どちらから出ているかを聞き取る聴力検査と同じで、異常のない人は数秒ですぐに読んでしまうものだが、赤緑色盲の人はそうはいかない。だって赤と緑がゴチャゴチャに入り混じっている中で、どんな数字が描かれているかサッパリわからないのだから……。

みんなすぐに読めるのに、なぜ俺だけ読めないの？ と思うとそりゃショックに決まっている。私の場合は、もともと物理・科学の理科系志望でも医者志望ではなかったので、事実上のトラブルはなかったが、パイロットを目指すドウェーンの場合、これはえらいこと。なぜならバスの中でフランクから言われたように、赤緑色盲の人はパイロットになれないわけだから……。さあ、それがわかったドウェーンのショックの大きさは……？ これはオリーブが決勝戦に出られると聞いて有頂天になった時の喜びの正反対……。

私ミスコンの審査員をしたことが……

あれやこれやのトラブルを何とかぐり抜け、やっと会場に到着したフーヴァー一家だが、3分ほど遅刻。ここで頭の固いおばちゃんは「受付終了」と冷淡だったが、捨てる神あれば拾う神あり……。

ミスコンの第一次審査は水着審査。私も20年ほど前に松原市民まつりでミスコンの審査員を務めたことがある。そりゃさぞ楽しいだろうと思われるかもしれないが、審査しなければならなくなると市民まつりのミスコンですら結構大変……。ここカリフォルニアで開催されている「リトル・ミス・サンシャイン」は各地区から選ばれた美少女12名が集まっているだけに、子供ながらそのレベルは相当なもので顔とスタイルはそれぞれ拔群。ところがたった1人だけずんぐりとした体型で、腹がぽっちゃりと出た女の子が……。

さあオリーブの出番だが……

水着審査の後は、1人ずつ得意技の披露。プレスシートを読むと、この美少女たちはみんな本物の美少女コンテストの出演者たちとのことで、それぞれの歌やダンスは大人顔負けのすばらしいもの。これはさしずめ、戦後の混乱期に突如彗星の如く現れた天才少女歌手、美空ひばりのようなもの……？

11名それぞれの出し物が終了に近づき、いよいよラストを飾るオリーブの準備も整った……。ここで控室に飛び込んできたのがリチャードそしてドウェーンとフランク。彼らがオリーブの世話をしていたシェリルに言うのは、一致して「舞台に上がるのを中止させよう」ということ。それは一体なぜ……？ それは、かわいいオリーブに恥をかかせないため。つまりオリーブはオリーブなりに一生懸命グランパの振り付けにかかるダンスをやるつもりだが、既に披露された11名の芸を見ているとそのレベルがあまりにも違いすぎるというわけだ。繰り上げ当選したからといって、あんなプロミたいな美少女と比べられたらオリーブがかわいそうなだけ……。

それを聞くと、シェリルもなるほどそのとおりで考えたが、オリーブだけは「やる！」と宣言し、いよいよ1人舞台の上に……。

爆笑、爆笑！ また爆笑だが……

それなりの衣装をまもってオリーブが舞台に現れると、鳴り始めた音楽はグランパと打ち合わせ済みのハードロック調のもの……？ グランパはオリーブには優しくだったが、一般的にはどう見てもヘンなじいさんだったから、こんな音楽で一体どんな振り付けを……？ そう思いながら観ていると、何とオリーブは身につけていたものを1枚1枚はがしつつ、観客にお尻を見せたり、足を開いたりという振り付けを……。こりゃ一体何……？ ここカリフォルニアのリトル・ミス・サンシャインの舞台上で今くり広げられているのは、ストリップまがいの卑猥でグランパ好みのハードなダンス……？

リチャードらに対して「受付終了」と宣言したお上品な審査員はみるみるうちに怒りにふるえ始め、遂に「すぐにダンスを中止しなさい」と命令したのは当然。

そしてシラッとしていた会場内からは、マユをひそめて退場する客も次々と……。そうなりリチャードたちは、逆にオリーブを見捨てるわけにはいかない。立ち上がって手拍子を取りながら応援していたが、音楽もダンスも佳境に入ってくると遂にリチャードたちも舞台上に上がり、オリーブと共に踊り出すことに……。こうなると、もうハチャメチャ。こんな大爆笑、大混乱のうちにミスコンは終了したが。その結果は火を見るよりも明らか……。

フーヴァー家の面々は負け犬、負け組……？

オリーブが順番を待ち準備を整えている間にリチャードは手際よくグランパの埋葬の手续を済ませていたようだが、それにはかなりインチキをしたのでは……？ それはともかく、フーヴァー家はやっとうこういう形でオリーブの夢を実現させることができた。結果は聞かなくてもわかっている。そう確信したりチャードやシェリルたちは、再びオンボロ車に乗って一路故郷のアリゾナ州を目指し帰路につくことに。

ここカリフォルニアの会場に到着するまでフーヴァー家の面々の心はバラバラで、トラブルだらけ……。そして晴れの舞台でもとんでもない大失態を……。こりゃさぞかしフーヴァー家の面々はみんな落ち込み最悪の状態だろう。そう思ったら大まちがい！ ここが人間の面白いところ。そしてこの映画が描こうとした最高のテーマ……。

結果はどうでもいいじゃないの。夢にチャレンジする機会に恵まれ、現実にチャレンジしたのだから……。エンジンのかかりが悪いミニバスを相変わらず「押しがけスタート」させながら、フーヴァー家の面々の顔は満足感いっぱい爽快そのもの。こんな彼らは果たして負け犬、負け組……？

映画前半はフーヴァー家の面々をそんな風に思っていたはずの多くの観客も、ラストでは決してそうは思わないはず。そして、これがこの映画のすばらしさ……。

2006（平成18）年11月4日記